あとがき

安田　常雄

感想として一つだけ書くことにする。

これは「戦時下日本の国策紙芝居研究」班の最新の地域調査の報告であり、すでに刊行した、大串潤児編『国策紙芝居―地域への視点・植民地の経験』（御茶の水書房、2022 年）の続編でもある。そこでは、直近の 2022 年東北調査を軸に、近年の各地の地域調査を網羅しながら、編集されている。この「別冊版」の最大の特徴は、これまでの地域調査の蓄積を基礎に、「方法」的な視点の導入によって、ある論理的な「中間総括」を試みていることであろう。その軸とでもいうべきは、秋田県土崎の藤田渓山の人物像、戦時翼賛体制下での多面的活動の精力的な「掘り起こし」にある。

私が興味深かったのは、第一に、翼賛体制期の藤田渓山の多面的活動であり、地域モダニズムを通過しながら、戦時翼賛体制下の「知識人」としていかに活動したかの軌跡であった。第二は、藤田が同時代の日本を、どのように見ていたかの屈折を含んだまなざしであり、特に「民衆」をみる視線の冷静さであった。それは「国を挙げて大戦を挙行してゐる日本人同志のあさましさ」という言葉に鮮明である。つまり同時代の一人の人物の見た戦時下日本の姿とその根にある「民衆観」が複合的に浮かび上がってくるからである。それは「国策紙芝居」を支えた「民衆」の実像であるからである。

このように考えてくれば、「方法の視点」の深い「吟味」と「点検」によって、単なる紙芝居作品の表層をなぞるだけの紙芝居研究ではなく、問題は、戦時下地域社会の構造や、その基礎にある「民衆」の屈折した両義性に垂心を下ろすことになるかもしれない。

そうした思考実験の試みを通しながら、あらためて「国策紙芝居」とは何かを問い直すことになるだろう。その意味で、「方法」の再考と「吟味」は、あらためて本研究班に課された問いとなっている。